

## 平成17年度 第1回高知県人権教育推進協議会まとめ

日 時 平成17年7月26日(火)  
13:30～16:30  
場 所 高知共済会館 3階 金鷄

### 1 開会

- (1) あいさつ
- (2) 日程確認

### 2 報告及び協議

- (1) 前回協議のまとめと平成17年度人権教育施策について
- (2) 「障害者の人権」に関わる現状と教育の取組

特別支援教育に関わる現状と課題解決の取組  
障害のある子の親として今思うこと(委員提起)  
質疑応答

- (3) 協議

【テーマ：障害者に関わる人権課題を解決するための教育をどのように進めるか】

学習によりわかったこと(知的理解)を生活化することが十分でない限り人権問題の解決への道のりは遠いと思う。委員から提起のあったことについて、具体的な改善点や解決に向けての手立てをこの場で話すことはできないが、校長会の夏期研修会で率直に問題提起したいと考えている。

日ごろから校長・園長は、アンテナを張っておく必要があるし、教員に問題があれば、子どものためにきちんとその教員を指導すべきだと考えている。

子どもを中心に、子どものために私たちが働くということは当たり前のことであり、ましてや障害の有無によってそれは変わることはないはずであると思う。

自分が元気な体をしていたら、元気な体でないことがマイナス的に可哀想であると思いがちなことは率直な子供たちの言葉だと思う。その辺りを周りの大人たちが可哀想ではないということはどういう視点で伝えていくのが大切である。

障害があるから可哀想だという目で見るとは、障害者は自分の生活を見つめ、自分の目標を決めて頑張っているということ子どもたちに伝えるような手立てが大切である。障害のある子どもたちへの教育は、自分たちの生活のなかでできることを目標に掲げ頑張ろうと意欲を促す指導が必要である。そのことが子どもたちの自立につながると思う。

委員から提起のあったことなどは、いろいろな機会を通して教育に携わっている人や子どもに関わる仕事をしている人に知ってもらうことが大切である。

(養護学校のマンツーマン指導のマイナス事例を指摘したうえで)子どもや保護者が本当に困ったとき、それを受け止めてくれる場がほしい。

人間として人の立場に立って対応のできる人材が求められる。人柄を重視した採用試験の実施を望む。

人が可哀想か幸せかというのは、決して形では見えない。それを見抜く目を養わなければならないと思う。それはコミュニケーションの問題でもある。そういう意味では、障害児

学級と通常の学級の子どもたちが自然にふれあえる機会を意識的につくっていくことが大切である。

(よさこいピックを例に挙げて) 障害があるのに頑張っているという見方ではなく、その人たちが選手としてどうなのかということ客観的に伝えることがマスコミとしても大事だと思う。フィルターを通してものを見るという習慣が身に付いているが、ありのままをもっとみることが大切である。

(本日配付の資料を含めて) すばらしい資料がたくさんあるが、現場にはなかなか浸透していないのが実態である。資料の中身が少しでも実践されたらと思う。

40歳前後になると価値観や人生観が固まってくるので、採用2年次で実施されている長期社会体験研修を30代半ばから40代ぐらいの時期に行えば子どもへの対応も随分変わるのではないかと感じている。

最近、教育自体がすごく効率化されていると感じる。学習の時間内にやるべきことがパッケージ化されていて、本当にそれで障害者理解ができるのか疑問に感じることも多い。

人権感覚を育むうえでは、体験や感動、気づきが大切である。パッケージ化された教育の中では知識が中心になりがちである。それを乗り越えるには、時間をかけ、行き詰まりを経験したり思考をしていくなどのプロセスが大切ではないか。

施設訪問などよく実施されるが、訪問するまでの事前学習が十分でないと感じると訪問したときの学習が子どもたちにとってマイナスイメージに働くのではないかと気になる。施設訪問することで子どもが何を感じているのかを大事にしたい。

年とともに子どもは入れ替わるし、状況の変化もあるので、前例踏襲のプログラムではいけないと思う。その時の子どもたちや時代、地域性にあった教育プログラムの検討が必要ではないか。

当事者の気持ちは、どんな福祉の現場においても代弁することはできない。できる限り学習の場に当事者が参加できるようにならないだろうか。

(重度心身障害者施設での初任者研修の事例を述べて) 人間として子どもたちに向き合うことのできる先生をどのように見つけ、採用していくかが課題である。

学校現場で、先生方に厳しい状況の子どもたちから学ぼうとする姿勢をもっと欲しいと思っている。

障害者の人権に関する問題については、制度的なことを改善したり、いくらバリアフリー化を図ったりしてもそれをきちんと生かせる人間がいなくては駄目だと思う。特に教師の場合は、自分の背を見せ黙って教えていけるだけの人権感覚あふれた教師であることが何よりも大切であると思う。

(様々なすばらしい資料のことを述べたあと) 人権教育の生きた教材は、学校現場をはじめ生活の中にたくさんある。それをどのように見つけて、どのように教えていくかということは、教師の資質になるのではないか。

古い言葉であるが、人権感覚を磨くには、被差別者、弱い立場の人から学ぶということである。そして、自分を変革させること。そういう教師を育てていくことも行政の仕事であると思う。